

平成21年6月30日現在

研究種目：基盤研究（C）
 研究期間：2005～2008
 課題番号：17520136
 研究課題名（和文） 野郎歌舞伎の演技・演出－「与論十五夜踊り」と新出の文献・絵画資料による研究
 研究課題名（英文） A Study of Acting and Interpretation in Yaro-kabuki(1652-1680)－A Study by Jugoya-dance in Yoron-island, New Documental and Pictorial Materials-
 研究代表者
 武井 協三 (TAKEI KYOZO)
 国文学研究資料館・文学形成研究系・教授
 研究者番号：60105567

研究成果の概要：

「与論十五夜踊り」は予想以上の型の崩れがあったため、なお分析研究を残すことになったが、沖縄県立芸術大学教授の板谷徹氏や元日本学術振興会特別研究員鈴木博子氏の協力のもとに、新出の文献資料に注目できたこと、さらに「登場の演技」と「笑いをよぶ演技」という視点を導入することによって、17世紀後半の野郎歌舞伎の演技・演出研究の実態解明を進展させたことが本研究の主たる成果であった。

交付額

(金額単位：円)

	直接経費	間接経費	合計
2005年度	1,400,000	0	1,400,000
2006年度	600,000	0	600,000
2007年度	600,000	180,000	780,000
2008年度	700,000	210,000	910,000
年度			
総計	3,300,000	390,000	3,690,000

研究分野：日本近世演劇

科研費の分科・細目：文学・日本文学

キーワード：野郎歌舞伎 演技・演出 与論十五夜踊り 奴ことば 藩邸記録 大名家文書

1. 研究開始当初の背景

本研究では、17世紀後半の野郎歌舞伎を演技・演出という視点から研究する。演技・演出つまり実際の舞台上で、何が行われていたのかは、歌舞伎研究の中核となるべき研究でありながら、研究成果はごくわずかであった。本研究はこの閉塞状況に入獄しようとしたものである。

2. 研究の目的

本研究は、歌舞伎史上、初期の時代に属する17世紀後半の「野郎歌舞伎」の演技・演出の実態を明らかにすることを目的として

いる。ゆりかごの時代の歌舞伎の演技・演出の実態を解明することは、歌舞伎が、どのような性格を持って生まれてきたかを解明することに繋がっていく。これは、歌舞伎という、我が国固有の芸能の本質究明のための、確固たる導入部になるだろう。

3. 研究の方法

本研究の方法上の特色は、新しい資料を導入して行われる点にある。歌舞伎研究資料は民俗資料・文献資料・絵画資料に分けることができる。新たに俎上に乗せる民俗資料は「与論十五夜踊り」、文献資料は『弘前藩

日記』等の大名家文書、絵画資料は「歌舞伎遊楽図屏風」などである。これらの資料を個別に詳細な分析を加え、さらに総合していくことによって、従来の研究ではなし得なかった、演技・演出の実態を浮上させる。

4. 研究成果

研究成果としては次の4点が挙げられる。

(1) 登場の演技の実態解明

17世紀後半に女方の元祖と呼ばれて活躍した初代玉川千之丞について、井原西鶴の評文、『古今役者物語』『剥野老』掲載の絵画資料を総合的に考察することにより、その登場の演技を抽出した。

玉川千之丞は松平大和守の日記によると「美しきこと、筆にもおよばず」と記され、また役者評判記には「声よく綾をなし」と評されている。容貌の美しさと声の良さが、彼の二つの大きな特質であった。千之丞は、この二つの利点を巧みに演出し、年間のギャラが1億円以上という、当代随一の人気女方となる。

初期の歌舞伎には、『伊勢物語』から題材をとった「河内通」という演目があった。別の女のもとに通う夫を送り出したあとの、妻の哀しみ苦しみ、そして嫉妬の情を表現するのが、その演目の眼目であった。

夫を送り出した千之丞の妻は、閨の枕をぬらし、ねむれぬままに、部屋を出て、夫が通う女の住む河内の方の夜空を眺める。このところの演出と演技が千之丞の工夫であった。

千之丞は、はじめ御簾の内に居て、歌を詠じる。観客には、まだ得意の小歌を聞かせるのみで、姿は見せない。客は美しい千之丞の姿がいよいよ見られると、期待をふくらませることになる。観客の期待が十分にふくらむのを待ってから、千之丞はおもむろに御簾を上げ、その姿を現す。御簾は下から上に上がっていき、彼の顔は、最後に観客に現前することになる。観客は美しい千之丞の顔を目の当たりにし、大きくどよめいたことと想像される。

こういった演技を千之丞が舞台上で繰り広げたことについては、井原西鶴が「千之丞が昔、風ふけば沖つし声にて歌い出して、家体の御簾をあげての面影、まことの女井筒も、何としてこれには、立ちならぶべし」(『男色大鑑』)と記していることが、有力な証拠となる。

千之丞は、この登場の演技の後、夫の不実を恨む妻を、姿と表情で表現し、観客の感動を誘うことになる。嫉妬に苦しむ女の表情は、能楽の面を参照したかと思われ、また、当時は珍しかった鏡を使って「すさまじい」と評される表情を創出したことも、『舞曲扇林』という資料から判かっている。

これが野郎歌舞伎の舞台上で行われ、大きな人気を呼んだ、千之丞の演技・演出の実態であった。さらに、この千之丞の演技は、後に嫉妬事という演技ジャンルを開く端緒となったことも、歌舞伎の歴史の上で重要なことであるとの指摘もできるのである。

(2) 笑いをよぶ演技の実態解明

野郎歌舞伎の演技には「見立て」という手法を使った道外方による笑いの演技があった。黒い布袋様の小道具を、冠り物やあご髭などに、次々と見立て、観客の笑いを誘った。これは現代の寄席芸能やボードビリアンの芸に受け継がれている。また、初代市川団十郎は大名屋敷に呼ばれて荒事を要請され、座敷の障子を牢の格子に見立てて「景清の牢破り」の様を演じ、大名の歓を得た。これら「見立て」による演技は、世界に類を見ない日本独特の笑いの演技である。

ここでは、本研究における最も主要な成果である、17世紀後半の道外方「ゆうなん三郎兵衛」の演技について、やや詳しく報告しておく。これは野郎歌舞伎の演技・演出について、その具体相に迫る、研究上数少ない成果となったものである。研究発表は平成20年9月20日イタリアのサレント大学で開催されたEajs(ヨーロッパ日本研究学会)で、“From the Warai in 17th Century's Kabuki to the Warai in Contemporary Japan”と題して行った。以下、その概要である。

17世紀の後半に活躍し、人気のあった歌舞伎の役者に「ゆうなん三郎兵衛」という道外方がいた。

ゆうなん三郎兵衛は物真似の名人であった。鳥の声の物真似や神仏像の形を真似ることが上手で、中でも仁王像の物真似を得意としていた。この仁王の真似が「見得」という歌舞伎独特の演技の出发点になったということについては、すでに記したことがある(『若衆歌舞伎・野郎歌舞伎の研究』(八木書店、二〇〇〇年))。

彼の物真似については、井原西鶴が次のように記している。

『難波の兒は伊勢の白粉』(天和三年1683)

又男が取り置き面のまへに移せし三十三神の替りたるかづき物

ゆうなんが取って置き面の構え、顔面の表情でもって、三十三種類の神仏像、これには仁王像も含まれるのだが、たくさんの神仏の顔を写し取った、というのである。ここに「かづき物」と書かれていることが注目される。

もう一つ資料を挙げる。

『物種集』(延宝六年1648)

河原者ゆうなんが付け髪、松千代が柿頭巾もかづき物ぞかし

ここにも「ゆうなん」と関連して「かづき物」と出ている。ゆうなんの物真似は、何か

「かづき物」と関係があるらしいのである。「かづき物」というのは頭に被る、帽子のよな物のことである。

ゆうなん三郎兵衛はどんな物真似をしたのか。ゆうなんの物真似を描いた絵が残っているといいのだが、残念ながら残っていない。ただ、彼の芸を引き継いだ、そろま七郎兵衛という芸人の絵なら残っている。やはり西鶴が書いた『諸艶大鑑』という作品に、次のようにある。

『諸艶大鑑』（貞享元年 1684）

格子の間は、外記が「平安城」の道行を語れば、おやま甚左衛門が仕出し人形、そろま七郎兵衛が二王の真似、口をふさぎて、見る人に口をあかす。

この文章には対応する挿絵が描かれている（勉強社『近世文学資料類従』西鶴編第3巻「諸艶大鑑」316-317頁参照）。「格子の間」、ここは大阪新町の遊女屋の「格子の間」という座敷である。「外記」という浄瑠璃語り「平安城」という浄瑠璃の道行を語っており、外記は挿絵中央で扇子を持って語る姿が描かれている。

「おやま甚左衛門が仕出し人形」、おやま甚左衛門は、挿絵の右の方に描かれている。女性の人形を裾から手を入れて遣っている。道行の場面だから、人形は笠をかぶり、杖を持っているわけである。

そして、「そろま七郎兵衛」は「二王の真似」と記されている。やはり挿絵を見ると、左側の上半身裸で仁王の真似をしている人物が、そろま七郎兵衛である。このそろま七郎兵衛は、ここでは実証を省略するが、先述のように、ゆうなんの芸を引き継いだ芸人である。このそろま七郎兵衛が「仁王の真似」をやっている様子が、挿絵には描かれているわけである。

仁王像には「阿」と「吽」の二体がある。

「阿」の仁王は口を開けている。「吽」の仁王は口を閉じている。ここでは、そろま七郎兵衛が口を「吽」と閉じて「吽」の仁王の物真似をすると、見ている人たちは「阿」の仁王のように、口を開けて「笑った」と言うのである。

観客はそろま七郎兵衛の何を見て「笑った」のか。彼が仁王そっくりの表情を作ったので面白かったのだ、ということは間違いない。ただ、それだけではないように思われる。

挿絵を詳細に見ると、そろま七郎兵衛の頭にあるのは髪の毛ではないように見える。髪の毛をこのように上でくくると、髪の毛の生え際が、もっと引っ張られて薄くなるはずである。ところが、この絵では、髪の毛の生え際が、ゆったりと厚ぼったくなっていて不自然なことに気がつかざるを得ない。これは何かを被っているのではないか。

そろま七郎兵衛はゆうなん三郎兵衛の芸

を引き継いだ人であることは既述した。そこでゆうなん三郎兵衛の資料に戻ると、そこには「かづき物」という言葉があった。挿絵のそろま七郎兵衛は、この「かづき物」を被っているのではないだろうか。

そろま七郎兵衛は、「かづきもの」を、あるときは髪の毛に見立て、あるときは唐人の帽子に見立て、またあるときは大将の兜に見立てるなどして、それぞれ、それらしい顔面表情を作って、観客を楽しませたのではないか。

この「見立て」の面白さに、見ている人たちは喜び笑ったのだらう。

実は、こういった物真似の芸は、現代の寄席芸能にも受け継がれている。

昭和の落語家の名人、柳家小さんは、七福神のエビス様の真似の芸をした。また、早野凡平というボードビリアンは、黒い布きれを、いろいろな被り物に見立てる芸で人気を博した。

面白いのは、早野凡平が舞台上で、この布のことを、小学生がお習字の時に使う物だ、だれでも簡単に手に入る物だと主張していることである。しかし、そこには嘘がある。凡平の使う小道具は大きさからいっても習字用のものではない。

なぜそんな嘘を言わなければならないのか。これは「見立て」というものが、ごく手近で卑近な物を使って行われねばならないという約束事があったからだと思う。宴会で行われる見立ての芸に、「月に村雲」とするのがある。今、宴席のテーブルの上、目の前に置かれている皿と箸を使うところが、ミソなわけである。

早野凡平が布きれを、すぐそのあたりで、いつでも手に入る、習字の下敷きだと主張するのも、この芸が「見立て」というものの伝統を引いているからだと思われる。

物真似の芸は「笑い」をよぶものであった。それは、よく似ているということだけではなく、日本の場合は「見立て」という要素をふくんでおり、ここにも「笑い」があったのである。

(3) 新資料の追加

平成17年度に野郎歌舞伎に直結する元禄歌舞伎の番付を4種発見して紹介したが、本研究において、さらに考察を進め当該番付は野郎歌舞伎時代に活躍した役者の動向を明らかにするところがあることを発見した。また、沖縄県立芸術大学教授の板谷徹氏や元日本学術振興会特別研究員鈴木博子氏の協力のもとに、琉球士族の記録『家譜』や金沢市立玉川図書館蔵『御能方』など新出の文献資料が研究上注目されるべきものであることを確認した。

(4) 野郎歌舞伎と「与論十五夜踊り」

「与論十五夜踊り」は予想以上の型の崩れがあったため、なお分析研究を残すことになったが、初期歌舞伎にも登場する近世初期の侠客の名前が詞章に歌われていることが確認できた。この点や「奴ことば」を導入部として、「与論十五夜踊り」を野郎歌舞伎演技・演出の資料にできるという予測が得られた。さらに、与那国や多良間の芸能も歌舞伎資料となし得る可能性があるという知見を得ることが出来た。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文] (計1件)

- ① 国文学研究資料館平成 20 年度研究成果報告『近世文学の表現技法〈見立て・やつし〉の総合研究プロジェクト報告書』4号 査読無し 2009年 p.82-84、p.93に掲載

[学会発表] (計2件)

- ① 武井協三 「17世紀歌舞伎の〈笑い〉から現代の〈笑い〉へ」 第12回E A J S (ヨーロッパ日本研究学会) 2008年9月21日 イタリア・サレント大学
- ② 武井協三 「玉川千之丞の登場—歌舞伎演技の形成—」高麗大学民俗文化研究院シンポジウム「18世紀東アジアの公演文化」2006年2月25日 (シンポジウム記録 査読無しP. 237-P. 259に掲載)

[図書] (計1件)

- ① 山下則子・新藤茂・加藤定彦・佐藤恵里・武井協三・安原眞琴・延廣眞治・高橋則子 八木書店 『図説〈見立〉と〈やつし〉—日本文化の表現技法—』(国文学研究資料館編)2008年 P.146-P.156「見立と歌舞伎」

[その他]

6. 研究組織

(1) 研究代表者

武井 協三
国文学研究資料館・文学形成研究系・教授
研究者番号 60105567

(2) 研究分担者

該当者なし

(3) 連携研究者

該当者なし